自著を語る

『文化の法則を探ろう』

〈三重大学出版会　2000.12〉
［所在］図・展示棚、図・開架・図書
［請求記号］361.6/N32

中川　正 先生
人文学部教授

「主婦は買い物のときに頬づえをつく」、「エレベーターに乗ると上を見る」、「とりあえずビール」など日常どこにでも「あるある」というような「法則」。
でもこれ、よく考えてみると、どうしてそうなるか気になりませんか？
もしそれが分かったら、色んなコトを考えるのが少し、いえ、すごく楽しくなりませんか。
身近な現象の中に法則性を発見することから広がる学問の世界について、中川先生にお話を伺いました。

「法則探検とは？？？」

――先生の著書や活動の中によく登場してくる「法則探検」とは一体どのようなものなのでしょうか？

「法則探検」とは日常生活にある様々な事象の中から法則性を発見し、解釈・説明し、それを応用する思考の流れです。法則探検は、学問を身近に感じて実践する一つのきっかけとなっています。私の専門は文化地理学なのですが、三重大の学生に実際に専門的な講義を行ってもなかなか自分に関連のあるものだとは理解してもらえませんでした。そこで、対象を専門的なものに限定しないで、日常生活の中にある身近な現象の中から法則性を発見し、考えてもらうことで、学生に学問との接点を持ってもらおうとしました。

「法則の汎用性」

――では、どんなことにでも法則は成り立つのでしょうか？

全てに法則性があるわけではありませんが、どのような対象であっても「法則性があるのではないか」と疑ってみることが出来ます。「法則」という言葉を手がかりとして、どのような現象にも問題意識を持ってみることができるようになるのです。もちろん、学問には様々な方法がありますので、問題意識を持つ上でどのようなアプローチをとってもかまいません。ただ、「法則」という用語は、文科系・理科系・実践系など領域を問わずに用いることができるものです。そしてどの領域にも共通する「（なにかを）発見し、説明・解釈を加え、応用していく」という思考の流れを生み出す上で効果的な概念です。

「法則探検を一歩進めて」

――法則探検を一歩進めて学問にしていくために学生さんへ、また「法則」以外のスタートラインから学問を始めた学生さんについても、どのようなことが学問を進めるうえで必要かのアドバイスをいただけますか。

自分の専門はしっかりと学びつつも、その分野の殻に閉じこもることなく、現実社会や日常生活に学問を活用しようと絶えず考える習慣を身につけてください。現実の社会には法則探検で用いられる発見、説明・解釈、応用を実践する機会が無限にあります。全人格を通して体験し、疑問を持った現象を学問と結び付ける訓練をしてください。そして、自分の専門以外の学問も学びながら、視野を広げる習慣をつけつつ、学問を進めてほしいと思います。

「先生から見た三重大学生」

――先生からご覧になった三重大の学生さんの法則は何かありますか？

三重大の学生には「きっかけをつかむと目が輝く」という法則があります。三重大生には勉強好きで、真面目で、常識的な人が多いと思います。それに、ある程度の基礎学力がありますから、鍛えればどんな分野でも活躍できると思います。自分が日常的にしていることが学問と結びつくのだと気付き、両者の接点を見出すきっかけをつかむならば、目が輝いて、自らの世界を広げていくことができるでしょう。

しかし、一方で、三重大生には「良いこととわかっていても苦労を避けたがる法則」もあります。法則探検授業やPBLセミナーなど学生が主体的に取り組まなければならない授業の受講生が爆発的に増えるということは今のところありません。大学生全体にいえることなのですが、安きに流れる傾向があります。苦労して何かを成し遂げることや、時には自分を追い込むことで伸ばしていくことも必要です。

「法則」ブーム

――今年新たに『法則探検に出かけよう』が出版され、また「法則カフェ」などの活動も活発に行われています。なぜ、「法則」はこのように人々をひきつけるのでしょう？

現代人には、人から与えられたお仕着せの学問を学ぶ以上に、自分だけの学問を作りたいという欲求が高まっているのではないでしょうか。そして、学問の発展のために仕える自分を養うよりも、自分を伸ばしていくために学問を活用したいという願いが芽生えてきているようです。法則探検は、そのような、実感を伴った学問を進める入り口となっているのかもしれません。もちろん、学問はつまみ食いでできるほど安易なものではありません。しかし、自分の専門を学びながらも、学んでいることと日常性との接点を保ちながら、自分の成長を実感したいという願いは健全なものだろうと思います。法則探検が、自らの学問を育てながら、自分の人生をプロデュースするうえで、何らかのお役に立てればと思います。

「三重大生の皆さんにメッセージをお願いします」

三重大生の皆さんは常識的で、真面目で、真剣にものごとに取り組むことの出来る人達です。法則探検に携わり、法則カフェや法則フェスタで自分の法則を発見している学生たちを見ると、実に活発で個性的です。その個性をそのまま出すだけで十分です。自信を持ってください。

三重大には、学問を通して「感じる力」、「考える力」、「生きる力」、「コミュニケーション力」を育てようとする理念があり、そのための教育体制を整備しています。皆さんの発見を社会に発信する法則研究プラザもあります。しかし、そのような環境も、主体的に利用しない限り、宝の持ち腐れです。

苦労することであっても、よいことならば、あえて積極的に一歩踏み出して、活用してください。そうすれば、卒業するころには、あなたは、思いもよらなかった領域に引き上げられている自分に気付くでしょう。

貴重なお話ありがとうございました

これだけは読んでおきたい READING LIST 各学部の先生からのオススメ本

共通教育　高山　進先生

コンラッド・タットマン 著　熊崎実 訳
『日本人はどのように森をつくってきたのか』
築地書館
［所在］図・開架・図書
［請求記号］650.21/To 73

アメリカ人の歴史学者が江戸期までの日本森林史を鳥瞰した本。ハイライトは、戦国時代から江戸の前期にかけて略奪的な森林伐採を経験した「日本の島々に、環境の破局が迫っているかに見えた。…ところが破局は起こらなかった」、その原因を深く問いかけているくだりである。彼は「生物的、技術的、思想的、制度的、生態的要因」の分析を試み、支配者の側からも民の側からも「強まる資源制約」に対応し森林を再生する動きが自生したことを丁寧に描いている。

生物資源学部　取出伸夫先生

岩田進午 著
『健康な土』『病んだ土』
新日本出版社
［所在］図・開架・図書
［請求記号］613.5/I 97

農薬と化学肥料を多用する現代農業は、収量の増加をもたらしたが、本来、土の持つ機能を失わせている。土は、物理的・化学的・生物的な環境変化を和らげる力、ホメオスタシス（自立的恒常性）を持つ。この緩衝作用が適切に働いているのが「健康な土」、失われているのが「病んだ土」である。持続的農業のための土と人間の関わりを、土の環境の観点から平易に解説している。自然と人間の共生を考え直すためにも、是非、一読したい。

工学部　北川敏一先生

東京都立大分子応用科学研究会 編
『材料化学の最前線 分子一個、原子一個をどう操るか』
講談社
［所在］図・開架・図書
［請求記号］430/Z 1

科学をわかりやすく解説するシリーズ「ブルーバックス」の1冊。分子ふるい・分子鋳型、めっきで作るマイクロマシーン、超々高密度記録への挑戦、薬の宅配便、宇宙の水・生体内の水など、好奇心をくすぐる22のテーマについて、分子を道具に先端材料をどう組み立てるか、その研究成果と広がる夢を紹介する。自然科学に興味をもっているが化学は専門ではないという人が、分子レベルの科学技術の魅力に触れることのできる本である。

医学部　野阪哲哉先生

ジェームス・D・ワトソン 著　江上不二夫／中村桂子 訳
『二重らせん』
講談社文庫
［所在］図・開架・図書
［請求記号］467.7/W48

生物学史上、20世紀最大の発見といわれるDNA構造の解明。この発見の経緯が堅苦しい回想録ではなく、当時のタイムスリップした形で、赤裸々に書かれている。私は大学時代、文庫本になる前に、これを読んだが、それまでに読んだどの小説よりも面白かった。科学者といえども、邪念をもった生身の人間であり、現場には様々なドラマがある。半面、一つの極めてシンプルな論文でも、内容が画期的ならば、その後の科学を一変させうるほどの影響力を持つ。人間模様と美しきサイエンス、どちらも刺激的である。天才児ワトソンの、正直すぎるが故の「問題の書」。

教育学部　姉崎　弘先生

姉崎　弘 著
『特別支援学校における重度・重複障害児の教育』
大学教育出版
［所在］図・展示棚
［請求記号］378/A 49

本年4月から特別支援教育の制度がスタートし、特別支援学校はその役割が一層高まりました。本書は、特別支援学校に多く在籍している重度・重複障害児の教育に関する初学者向けの入門書である。重度・重複障害児教育に必須の基礎理論を概説するとともに、著者の12年間に渡る特別支援学校現場での実践に基づいて、この教育の実際的・具体的な取組み方について事例に則してわかりやすく解説している。特別支援教育を志す学生・教員必携の基本テキストである。

人文学部　武笠俊一先生

柳田国男 著
『雪国の春』
角川文庫ほか
［所在］図・開架・図書
［請求記号］382.12/Y53

柳田民俗学を学ぼうという若者には、まずこの書を勧めたい。学問の草創期に書かれた本であるため、柳田国男の問題意識が直截に語られているからである。彼はささいなケンカがきっかけとなって役人を辞めた後、朝日新聞に入社して東北旅行に出た。この時の紀行文と東北の歴史・文化に関する柳田の論考とがここに収められている。書名ともなった「雪国の春」、「子供の眼」「おかみんの話」「清光館哀史」、みな忘れえない名文である。